

「日本人評価」研究の成果は教育現場に還元可能か？

小林 ミナ

北海道大学留学生センター /

大学院国際広報メディア研究科日本語文化論講座助教授

minakob@isc.hokudai.ac.jp

1. この発表の目的：

- 1.1. 「日本人評価」研究プロジェクトの概要を紹介する。
- 1.2. その研究成果が教育現場に還元可能かどうかを考察する。

2. 「日本人評価」研究プロジェクトの概要

2.1. 「日本人評価」研究とは何か

「日本語学習者の日本語運用に対して日本語母語話者が何に注目しどのように評価するか」を明らかにする研究。

母語話者評価 (native speakers' reaction), 誤りの重みづけ(error gravity),

平成 12~15 年度文部科学省科学研究費基盤研究(B)(2)「日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか」、研究代表者：小林ミナ、研究分担者：柳町智治、河合靖、鈴木志のぶ(以上、北海道大学)、山内博之(実践女子大学)、河野俊之(横浜国立大学)、横溝紳一郎、松崎寛(以上、広島大学)

2.2. 研究目的

- 1) 外国人の日本語運用に対する日本人の評価の実態を明らかにする。
- 2) 目的1)で得られた結果を日本語教育の現場に還元する方策を考察する。

2.3. 方法：

「刺激ビデオ」の作成 「評価資料」の収集 「評価資料」の分析
日本語教育への還元

2.4. これまでに得られた作業仮説：

2.4.1. 評価者の属性と評価

一般日本人による評価 / 一般日本人による評価と日本語教師による評価 / 上級日本語学習者による評価

2.4.2. 学習者要因と評価
学習者の日本語レベル

2.4.3. 評価対象項目と評価
音声 / 文法 / ジェスチャー

2.4.4. 教育現場への応用

2.4.1. Learners of the Japanese language will be able to:

1. become aware of learning items which receive NSs' positive evaluation (and attempt to enhance their own performances on the items).
2. become aware of learning items which receive NSs' negative evaluation (and attempt to correct their own performances on the items when necessary).

Yokomizo 2002

2.4.2. The two-way perspective for native speaker evaluation studies

The NS evaluation by EFL learners with higher English test scores was closer to ACTFL grading than the evaluation by learners with lower scores.

The native speaker evaluation might become a valuable tool to promote foreign language learning.

Kawai and Hiromori 2002

AILA 2002 Singapore, 13th World Congress of Applied Linguistics, Singapore: Symposium, Native speakers' perception and evaluation of learners' linguistic performance: Findings and pedagogical implications of a project in Japanese as a second language

3. 「日本人評価」研究の成果は教育現場に還元可能か？

：プラス評価とマイナス評価の質的相違からみた教育現場への還元可能性

3.1. 目的

日本人母語話者（大学生）から得られたコメントを，プラス評価とマイナス評価の観点から分析し，教育現場への還元可能性を考察する。

3.2. 調査の概要

調査材料：中級レベルの学習者と日本人の自由会話場面の録画（3分間）

被験者：言語・言語教育を専攻としていない国立大学大学生91名

方法：上の録画ビデオを2回視聴し、学習者の日本語について、「上手だと思うところ（＝以下、プラス評価）」と「上手じゃないと思うところ（＝以下、マイナス評価）」を、それぞれ自由記述する。

3.3. 結果

3.1. 得られたコメントの数

	【指摘あり】	【指摘なし】	合計
プラス評価	151	95	246
マイナス評価	118	180	298
合計	269	275	544

表1：得られたコメントの数

【指摘あり】

学習者の発話をそのまま抜き出しただけのもの

プラス評価：「えーと」、「そうそう」、「オーストラリアから来ました」「テレビで見ました」等

マイナス評価：「いちばんいいの席……」、「日本、来た前～」、「オーストラリア」、「(テレビを)見えなかった」等

学習者の発話とそれに関する評価の観点・内容を記述したもの

プラス評価：「『～ですよ』とか言っていて、くだけた感じがでていた」、「『ディレクTV』とかいうような単語を多く知っている」、「『見たかった』など過去形が使えている」、「『そうそうそう』が自然な会話になっていた」等

マイナス評価：「修飾するのがあまり上手じゃない 例、住んでいるノ場所、ノはいらない」、「ふつつ日本語では「オーストラリアで一番の」というところを「一番のオーストラリアで」といっていたのでまだ英語の語順が抜けきれていない感じ」、「ウンじゃなくてハイっていったほうがいい場面だと思います」等

【指摘なし】

具体的な発話箇所への指摘がない

プラス評価：「文の内容がはっきりわかる」、「語順がしっかりしている」、「相づちが日本語で自然にいうことができている」、「会話表現ができているところ」等

マイナス評価：「接続詞がうまく使えてない」、「ところどころイントネーションがおかしいところがある」、「名詞を並べるところ」等

3.2. 得られたコメントの偏り

	【指摘あり】	【指摘なし】
プラス評価	-5.07**	5.04**
マイナス評価	5.09**	-5.04**

表2：カテゴリーごとの残差

4. 考察

プラス評価に【指摘あり】が少ない。抽象的な現象・印象を述べることはできるが、そのような現象を支えている具体的な箇所を指摘することが難しいことを意味する。

マイナス評価に【指摘あり】が多い。マイナス評価において【指摘なし】が著しく少ない。誤用箇所を指摘することはできても、その内容や理由を説明することは、母語話者には難しい。

プラス評価とマイナス評価の質に関するこのような差違は、Yokomizo 2002の2つの指摘（「プラス評価される要素を意識する」、「マイナス評価される要素を意識する」）が、必ずしも表裏一体の関係にないことを示唆している。すなわち、具体的・個別的なコメントが得られたマイナス評価の内容を、学習内容に還元することは比較的容易であるが、抽象的・全体的なコメントが多いプラス評価の還元は、困難であることが予想されるからである。